

夕霧阿波鳴渡

近松門左衛門作

上之卷

餅花—正月に柳の枝に餅の球を日取吉田屋—日取よしにかけた吉田屋は九軒の揚屋
 阿波津の歌—仁徳帝の高き屋に登りて見れば云云の御歌
 大杵云々—大杵を多きに昇夫を下すにいかく
 恵方棚—遠徳棚谷の戸—年期を終へて遊女が廊

年の内に春は來にけり。一白に、餅花開く餅搗の、賑々はしや九軒町、嘉例の日取吉田屋の、庭の竈は難波津の、歌の心よ蒸籠の湯氣の大杵、昇夫の長兵衛が大汗で、「やあるゑい」中るの萬が白取の、「さつ、やあるゑい、さつ、やあるゑいさつ」さつさ搗けく、「ハツア木やりで搗やれな」先恵方棚、神の棚、鏡取るく遣手衆の、顔にとりこの面白いとて妓衆の笑ひ、禿が手折る柳の枝の、春も近づく、年も近づく、やがて廊も谷の戸も、出て初音の鶯の、羽子づくろひの君も有、正月買のセツヤゾロだいぐ、盡、太夫様より附届ケ、門を賣る聲山草や、ちよつと祝ひましょ。裏白、櫟、鱒で御座んせの春永に、いよしも替らぬ御見まで、逢瀬を契る餅は杵、ついて離れぬお容を祝ひ、白へ入ます、ますく、全盛、座敷は善哉庭には、節季候、こりや又目出たい揚屋の餅搗、紋

を出るに譬ふ
つけ眉一塵鏡の
裏白一齒朶
障一正月に飾る
魚、遊者にかく
彌しも云々愈
よ登らずに御目
にかゝる
節季候一頭に齒
朶を頂き赤き布
にて面を覆ひ萬
歳の如く歌舞す
る者
女郎家に一女郎
には遊手がつく
勤めも心のまゝ
一勤も夕霧の勝
手に任す
投入一活花の
語、簡略の挿方、
身を投るにかく
角前髪一少年の
髮形

日の長持、お客に太こ持、こりや又賑々女郎衆に遣持、お家は金持代々福々、松吹く吹くく、松風や、松賣る聲こそ。三重戀風の、其扇屋の金山と、名は立のほる夕霧や、秋の末よりふらくくと、寝たり起きたり面瘦て、薬も日數ふる雪の、重らぬ先の養生と、勤めも心まよなれど、深きよしみの吉田屋は、足本輕き道中や、暖簾くどるも力なく、夕今日は目出度ふ御座んす。ア、しんどうや」と腰打懸け、我身を横に投入れの、水仙きよき姿なり。喜左衛門機嫌能「是はく、太夫様、御氣色も能いかして、聞た程瘦もなされず、お顔持もずんど能い。先今日は嘉例の餅搗、格子へお出なされてより去年の今日まで、伊左衛門様とお兩人、一度もお外れなされぬに、今年の餅搗ばつかり、伊左衛門様は流浪遊ばず、お前は御病氣、嘉例を外す處、此喜左衛門頭痛八百。ちよつと成共呼ましたいと願ふ折柄、今日のお客は四國のお侍、頭巾で頭は見へね共、角前髪のお小性らしい。其器量の能さ、おほこさ、道頓堀の若衆方女方、引渡へてもけも無い事。四國西國隠れない夕霧といふ太夫に、近付になりたいて、態々大坂で御越年。お氣合に構ふとて、初対面はお勤めなされぬも存ながら、呼に進ぜた。さすがお馴染の喜左衛門、否應なしのお出、身祝ひと申、どつといふた餅搗、女房も尻餅搗て悦びます。是杉、沖

參らせ候一行程
次第に遊ばせ

食出し鐔一短刀
に用ゐる鐔

縛まかれな一様
てふたれるな

之丞、中の間へ往て善哉祝や。此處は冷えます太夫様、先お座敷へ」といひければ、夕ア
ア私が氣色も能いが能いには立ね共、伊左衛門様と二人連、一度もかよさぬ今日の日な
れば、命の内にもちよつと來て伊左衛門様に逢ふ心、此方様達の顔見たいと思ふ折節、呼
に來たを幸に此處迄は來ました。座敷は氣儘に勤める、左様思ふて下んせ」喜何が扱御
氣任せ、どふ成共、にやらしやんせ」と、座敷へこそは出しけれ。冬編笠も垢張て、紙衣
の火打、膝の皿、風吹凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとすれど古の、花は嵐の願に、今日の寒さを
喰しぼる、食出し鐔も神さびて、鐘詰りし師走の果、胡散らしく吉田屋の内を覗いて、
伊喜左衛門宿にか、ちよつと逢ふ。喜左衛門く」と鼻に扇の大柄なり。男共口々に、
「ヤア彼奴は何者じや。風の神か、鳥威しの様なざまで。何んじや、喜左衛門に逢ふ。
百貫目も遣ふ大盡のいふ様な、棒まかれな」と云ければ、「ヲ、百貫目がそれ程貴い物で
もない。喜左衛門といふべき者でいふ程に逢せてくれい」男共「どりや逢せてくれふ斯ん
な目に遭せてくれふ」と、竹箒持てかよるを、喜左衛門飛下り、「強請者か知らぬ、粗相
すな。誰方で御坐る」と笠を覗いて、喜「ヤア伊左衛門様か」伊「何んと喜左」喜「これは夢
か七ツか、扱お久しや懐しや。京大佛の馬町に御逼塞とうけ給。霧様よりは數通の御狀

師走坊主一被に
かく
遣一遣手
長刀草履一穿き
古した草履
いはれぬ一之は
措いて貰はう

負は一負ふ

穂長一齒袋

雁一角やにかけ
たり

飛脚も二三度、奈良、大津迄尋させ、たつた今もお噂。先お馴染の小座敷で、二年積るお物語。いざお通り」と袖引けば、伊ア、紙衣障りが荒いく。是引けば破れる一摺めは跡に師走坊主、師走浪人、昔は遣が迎ひに出る。今は漸長刀の草履を脱いで編笠の、中の座敷に通りしが、「お寒からふ」と喜左衛門、縮緬に紅絹裏の小袖をふはと打かくる伊ア、是はいはれぬ。寒晒の伊左衛門、少も苦しからね共、芳志を著致す」と、戴いて著る有様、喜左衛門つくづく見て、「エ、浮世じや。藤屋の伊左衛門様に、此吉田屋の喜左衛門が著せまする小袖、假令蜀江の錦でも戴いて召ませふか。眞に涙が翻れます」と目を擦るを見て、伊いや是喜左、此紙衣の仕合、さらく無念と存せぬ。惣じて重たい俵物材木でも、牛馬が負はは珍しからぬ。犬か猫が負はたらば、是はと人が手を打ふ。我等も其通、紙子の拾一枚で、七百貫目の借銭負はて、ぎく共せぬは恐らく藤屋の伊左衛門、日本に一人の男。此身が金じや、それで冷て堪らぬ一葦「ヤアウ此身が金とは忝い。喜左衛門が餅搗に大きな金がお入なされた。これ嗅、未だ蓬萊は飾らね共、先正月の心、三寶飾つて持ておじや」とて入れれば、内義は「應」と櫓に、穂長折敷く橙、柑子、蜜柑や何や櫃、搗栗、妻お床しやく。久振で御無事なお顔、お嬉様や」と出けれ

身が事一俺が事

せいたる一怒きたる

ば、伊左衛門とかふの挨拶涙ぐみ、「夫婦の衆が念比に、蓬萊と迄氣が付け共、夕共霧共云出さぬ。仄に聞けば夕霧が、身が事を氣病にして、命あぶなしと聞及びしが、いかふ重いか、但無常の夕霧と消失せてしまふたか、歎きをかけまいとて云出さぬか、誓文で泣まい語つて聞しや。泣ぬく」といふ聲も、氣遣涙に濁りけり。誓「いやく、是はお道理、霧様の御氣色、秋の比は散々で、勤もお引なされしが、寒に入て少御快氣。則阿波のお侍、正月もなさるよ筈で、今日是に」と、云ひも果ぬに伊左衛門、「ヤアく、それは眞實か」誓「はてうそか誠か、隣座敷覗いて御覽なされませ」伊左衛門はつとせいたる顔色にて、しばし詞もなかりしが、「なふ内義、天地開け始めて、誠ある傾城と、迦陵頻の雄鳥は、繪に書たも見た者ない。惣嫁の様な傾城奴に、微塵も心は残らぬ共、知ての通、彼奴が腹から出た身が悴、しかも男子で明れば七歳、元の遣手玉が才覺で里に遣たとやら、今日來たは、其悴が事に付て來たれ共、定て里に遣たも僞、捨殺してがな捨つらん。阿波の侍と云は合點、此前我と張合た阿波の大盡平と云者、つらく思へば、傾城買より紙屑買がましじや。金出して此方へ取物は狀文ばつかり、七百貫目が紙屑では、富士の山の張拔も樂な事。仕合の悪い時は何で損をせふも知らぬ。無用の涙で紙衣の袖濡し

けんどん一怪貧
齋寥

襖の蔭より一夕
霧が差覗くなり
兩人一夕霧と伊
左衛門
彼の人一伊左衛
門をさす
何がなしほに
何かの機會に
ばつば一立派か
炮礮頭巾一黒
の帽の如きもの
紙花七九す一祝
儀を與へる代り
に紙を渡すをい
ふ其延紙の長さ
七寸に九寸なり
なめたり一失禮
なり

た。織目が離れぬ先に罷歸る」と立んとす。婁ア、あんまり御短氣。奥のお客は平様では御坐りませぬ」伊いやく平でも壺でも、此方仕度能ふ御坐る」と立上る。婁それはお前の慳貪と申もの。先夕霧様に逢せましょ」伊いや逆もけんどんなら夕霧より蕎麥切に致そふ」とすね廻る。其中に奥座敷より手を叩く。婁あれ禿衆は何處にぞ」と、いひつと出る内義に連れて、襖の蔭より差覗けば、兩人馴れにし床柱、もたれ懸るも形見ぞと、忘れもやらぬ物越は、慥に彼の人何がなしほに座を立て、逢たや見たやと心もせき、反向て向ふ客の顔、左も大名の小性扮、風よしの衣裳付、ばつばの鮫鞘、象眼罽、若紫の炮礮頭巾、懷中より香包、名木火鉢に薰らせ、「噴是へ來やれ。身なんどが様な奉公人は、殿の御前に相詰、たまさか遊興所へ參るも氣晴しと云内に、第一は夕霧殿に戀有故、君の機嫌の能い様にお身を頼む。一ツ飲やれ肴せむ」と、ひらり紙花七九寸木枕に打敷て、横に鳴門の阿波大盡、夕霧が襦に兩足ぐつと入れれば、夕扱もなめたりく。此夕霧に足もたすは、こりや少と慮外そふな。夫れ程足が苦にならば、打折て捨たが能い」と、いひ捨てつと立、次へ出れば伊左衛門、ちやつと寢轉ぶ肘枕、空寢入して高敷、はつと計に夕霧、我身を共にうちかけに、引纏ひ寄せとんと寢て、抱付

締寄せ泣けるが、夕なふ伊左衛門様く、目を覺して下んせ。わしや煩ふて、疾ふに死ぬる筈なれど、今日まで命生存へたは、ま一度逢せて下さるゝ神佛の控へ綱。是懐しうはないかいの、顔が見たふはないかいの、目を開て下んせ」と揺起しく、抱起せばむつくと起き、横ざまに取て投げ、伊「是夕霧殿とやら、夕飯殿とやら、節季師走此方の様に際ではない。七百貫目の借錢負はて、夜晝稼ぐ伊左衛門、此様な時寝ねばならぬ。邪魔なされな惣嫁殿」と、轉りと臥て又ごうくと空躰。夕ム、ウ身に覺えはなけれ共、恨みがあらば聞ませふ。寝させはせぬ」と引起す。伊「は何とする。此躰でも藤屋の伊左衛門。今の如く奥座敷の侍に、踏れたり蹴られたりする女郎に近付は持ぬ。此處な萬歳傾城、萬歳ならば春おじや。通りやく」といひければ、夕ム、ウ此夕霧を萬歳とは」伊「チヲ萬歳傾城の因縁知らずか。侍の足にかけて蹴らるゝを、萬歳傾城といふぞや。誠に目出度ふ侍蹴る。しかも足駄履て蹴るやら、年立かへる足駄にて、誠に目出度ふ侍蹴る。聞へたか。去ながら何も身過ぎ、あの様な好い衆には蹴られても損は往ぬ。慾を知らねば身が立ぬ。慾若に御萬歳や、年立かへる足駄にて、誠に目出度ふ侍蹴る。町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、蹴るく蹴る」と蹴散かし、伊「是喜左、餅でも米でも遣てやりや」

侍蹴一候ひける
に通はせたり

慾若一徳若をも
しる

さらぬ體知らぬ風也、血にか

四十八枚一彌陀の四十八願に通はす胸慄一同發者揚にか

と、烟草引寄せ吹く烟管の、さらぬ躰にて居たりけり。夕霧わつと咽せ返り、「エ、此方様共覺えぬ。此夕霧を未だ傾城と思ふてか、ほんの女夫じやないかいの。明れば私も廿二、十五の暮から逢ひかゝり何年に成事ぞ。もふけた子さへま少とではや七ツ。誠をいはど今比は一門中の狀文にも、伊左衛門内よりと書ても人の咎めぬ事。私に恨みが有ならば此方様にも恨みが有。去年の暮から丸一年、二年越に音信なく、それは幾瀬の物案じ。それ故に此病、瘦衰へが目に見へぬか。煎薬と煉薬と鍼と按摩で漸と命繋いで、たまさかに逢ふて此方様に甘ようと思ふ所を逆様な、こりや慘らしい何ふぞいの。私が心變つたら、踏んで計置んすか、叩いて計置んすか。是死懸つて居る夕霧じや、笑ひ顔見せて下んせ拜んます。エ、心強い胸愆な、憎や」と膝に引寄て、叩いつ擦つと聲を上げ、涙亂れて髪ほどけ、わけも性根も無りけり。伊左衛門も涙に暮れ、「ヲ、あやまつた。外にさして恨みはなけれ共、命にかへぬ大事の女房、奥座敷の若い者、我物頬がむつとして、思はぬ腹立こらへてたも。我とても浮身の躰、誠の正躰見給へ」と小袖くるりと脱ければ、肌に袷の破れ紙衣、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、胸慄うこそ哀れなれ。伊左衛門涙を押へ、「扱彼の悴は無事で里に居る事か、何んとしたぞ」と云けれ

おとましうと
まし

ば、夕されば其子を里に遣しと申せしは、偽儘ならぬお身の上、苦勞にさせます氣の毒さ、彼の阿波の大盡平岡左近といふ人と、私とが中の子といひかけて塗付て見たれば、人は愚な、まんまとたらされ受取て、「腹は假物武士の種」と、寵愛に逢ふと聞につけ、身の憂き時は色々の怖い智慧も出るもの」と、語りもあへぬに伊左衛門、「ム、ウ左もあらふ事。去ながら我古の手代共、其子をつき立、母へ訴訟し、藤屋の家を取立度いとの談合有。どうぞわけをいふて取返す思案が仕度い」と云處に、奥より内義色違へ、「なふおとましやく。お二人爰の咄が奥の座敷へ筒拔、お客様は不興顔、直に逢ふていふ事有と今此處へお出。なふ喜左衛門殿、此方の人」と、皆々怖りひそめく處へ、客は刀を提げ、「ア、是伊左衛門殿夕霧殿、驚く事は少もない。是其證據」と頭巾を取れば、突出し鬢の下笄、鼈甲挿櫛、さしもの粹共、惘れて不審晴れやらず。登、チ、いかにも不審の立はづ。男に化けたる其間は何の其と思ひしが、女子の姿を顯して此中で物申は、おはもじながら、彼の阿波の大盡平岡左近が本妻雪と申は我身事。夕霧殿の假の情、連合の子を誕生とて此方へ請取、いはど我が悦ぶ子、腹も痛まず苦勞せず、産で囉ひし忝さ。他にもせず守育て、手習、讀物、弓、鎧迄も器用にて、國隣の土佐駒引せ、乗つ

あられぬ一見ち
れぬ風

さがなき一不祥

御改易一族籍を
除き資財一切を
没収する刑罰
阿房拂一追放

た姿は天晴平岡左近が世繼、七百石の主なりと御家中の褒め者、嘸見たからふし見せたし。一つは彼の子が冥加の爲、夕霧殿を請出し、一所に伴ひ暮さん、と心根も聞ん爲、鐵鬘落しつあられぬ態で、只今聞けば我連合をたらして、伊左衛門の子をつき付たと、聞よりはつと胸塞り、夫の武士は廢つた。エ、恨めしい夕霧、男に化たを幸に、飛かかつて刺通し、我も死ふと刀を取は取たれ共、死んだ跡で、此雪が傾城に愒氣して、阿房死といはれてはいよく、男の名を出す、と留るも殿御を思ふ故、無い事さへいふ世のさがなき。阿波の平岡左近こそ、町人の子を傾城に突付られたと取沙汰し、殿様の御耳に立ば、よい仕合で御改易、阿房拂か切腹か、死しても悪名消えばこそ。此處を丁簡し、彼の子を其儘下されば、侍一人の取立、生々世々のお情ぞや。我人我子は大事のもの、殊に思ふ人の子を、思はぬ人の子といふは、何しに心能からふぞ。それは流れの身の辛さ、侍の妻には又此様な憂き事有。女子と生れし此因果、女御更衣になるとても、うら山しうは思はぬ」と、心の底を口説立て、涙わりなき物語。夕霧夫婦、吉田屋の一家袖をぞ濡しける。伊左衛門つと出、「ハ、ア賢女哉貞女かな。左近殿とは夕霧故遺恨はあれ共、それは私。拙者も彼の悴を力に、出世の望み御坐れ共、武家のお名には替られず、

ざんざんざん 服々
しい
なりふりなる
と姿

口をきこー奥を
きこより口をき
けの語を反對に
つかひたり

豆男ー忠實な男

進ずると云迄もなし。以前夕霧が申通、左近殿の御子息。伊左衛門が子では御坐らぬ。雪「ア、忝い。夕霧殿も左様じやぞや」夕「はて主の合點の上からは、私が否とは申されぬ。去ながら、命の内ちよつと見せて下さんせ」と、涙に咽ぶぞ道理なる。雪「チ、心得た。く。萬事胸に込めました。身請の事も吉田屋と近々に談合しませふ。あの子が成人するに付、伊左衛門殿も樂み。サア契約の堅めの盃、いよくあの子は此方の子、平岡左近が惣領」さらりくと手を打て、廓でざんざん珍しし。日も暮かよれば若黨、中間駕籠釣らせ、「阿波の旦那のお迎ひ」雪「是下人も忍ぶ此姿、元の男となりふり偽り、頭巾大小、印籠、巾著、雪亭主さらば。夕霧事は追付是より便宜せふ。萬事頼む」雪「請込ました」と膝を屈める、腰屈める、腰本伴れるを引換て、昇夫が送る大門や、口をきこより奥様の深き情や 三重 立歸る。

中之卷

春や延寶六年と、明渡る世も昔の京、難波の今朝は珍しき、妻子引具し舊冬より、上本町の道場の玄關構借座敷、お國の御用新玉の、此處に年取るまめ男、阿波國平岡左近と

しほらしー雙ら
し
ナツオー鏡を振
る形容

あどなきー無邪
氣な

宿札も、門の飾に時めきて、武家は綺羅有春なれや、表の物見に女中の聲々、「申奥様
 珍しい大坂の正月を始めて見物致し、お國へ歸つて能い咄。是もおかけ」と悦ぶにぞ。雪ヲ
 ナク其方達が云通、主のおかけは忝い。御用に就て左近殿、我々連れて、僅か逗留の
 旅宿へ、今朝から禮者の絶へぬ事、皆殿様の御威光。左近殿は源之介連れて、天満とや
 らの神明様へ惠方參、親の子としてしほらしい、六ツや七ツで馬に乗る。追付左近殿の名
 代、御奉公勤めるを見るで有ふ」と、御悦びの處へ旦那の御歸り、前供走る黒羽織、す
 つく素鎧、栗毛の馬、のつし髪斗目に麻社衾、親に續いて源之介、明て七ツの乳のま
 ふ。饅頭形の中刺も、目元賢きうなる松、千代を嘶ゆる土佐駒に、手綱搔繰りしやんく
 しやん、轡の音ははりよんく、りんと坐りし袴腰、物見の前を乗廻せば、母是々源之介
 戻りやつたか、目出度い。嘸馬上が寒からふ。溫柔い出來しやつた」と、招かれて
 源之介、「申母様、惠方參に天満へ寄て、是買て來ました」と、土人形の天神、手綱に持
 添へ、「私がこれ持て居るのを、道通が見付て、父様を見知て居るやら、親は太夫買ひ、
 子は天神買ふと云て笑ひました。おれにも大きな太夫買ふて下され」と、あどなき詞
 に、こし本共氣の毒がり、「是しるく」と目ませずれば源之介、「ヤイ駄賃馬の様にしる

白泡—知らぬに
かく

結縛—心のよき
事

にやこい—女に
甘い
小舌たるふ—あ
まえて
あた分云々—は
んに對があるい
愛付—もだてる
もやく—むか
むか
定—必定

しるとは不調法な。侍の乗馬は、是此様にはいく、はいく、いと、親の心も白泡
嚙せ、門内へ乗入し振り、いたい氣に溫柔しし。今の詞にこし本衆、口をとちて奥様の機
嫌を窺ふ躰なれば、雪是々源の咄を聞たか。道通が左近殿を太夫買と云たけな。此前大
坂お屋敷役の時、新町通ひに夕霧と云太夫に馴染をかけ、源之介を設けたは定て皆も聞
つらん。人の見知るも道理。大名高家も母方の吟味はなし、大事ないとはいひながら、
彼の子の心は、此雪を産の母と思ふて居る。必々夕霧が子と云噂禁制ぞや。其夕霧をも
請出し、彼の子がお乳に置く筈、傍輩竝みに待遇や」と、仰せも果ぬにこし本中口々に、
「ア、奥様の餘り結構過ました。我々がなんほ沙汰を致さず共、彼の傾城のばしやれ者、
それをいはずに居ませふか。お袋振て鼻高ふ、お家をありたい儘にして、奥様を踏付る
は今の事く。未だそれ計か下地がにやこい旦那様、小舌たるふ仕懸たら、ほつかりと
喰付て、田も遣ふ畦も遣ふで、奥様は控伺鼻明て仕廻んしよ。小無益しいあた分の悪い、
こり、御無用に遊ばせ」と、焚付らるゝ女心、雪ア、いへば左様じや。おれは甚い阿房
じや。いのりも除たい戀の敵持て居て當がふは、盗人に賊の番、磁石に針、皆に氣を付
られて、はやもやくと腹が立。後に悔の出るは定、請出す事を止め遣ふ。皆出來

冨海悋氣―身に
關せぬ者を妬む

物もうどれい―
物申さう何れよ
りも出なり(貞
丈雜記)

ない―はい

身に逢―我に逢
ひたいと云ふべ
き處

の太い―大體

た、能ふいふてくれた」女中扱は彌々止めになされますか」雪「はて止にせいで何んとせふ」女中「ア、氣がさつぱりと成ました。お林殿よい氣味か」林「私や痞が下ました」おしゆん殿は何んと」しゆん「此方や金拾ふたより嬉しい」と、身に徳もなき法海悋氣、是ぞ女の習ひなる。雪「あれ北から十文字の道具、御藏屋敷の小栗軍兵衛様年頭の御禮。御一門の中でも彼方は堅い。それやく」物見の簾下す間に早や立關に、「物まう」家人「どれい」「小栗軍兵衛御慶申ス」家人「旦那幸宿に有。いざお通り」と云ければ、軍兵衛立關に立て、「是家來共、御用に就て左近殿と申合する事有。暫く隙が入るべきぞ、屋敷へ歸つて八ツ時分迎ひに來い」家來「ない」小栗「其中少早く來い」家來「ない」小栗「油斷するな」と入れれば、若黨始め草履取、挾箱、皆々宿所へ歸りしが、道具持の槌右衛門、一人残つて臺所覗き、「誰ぞ頼みませふ。飯炊の竹呼出して下され」といふ處へ、馬取の角介苦い顔して、「ヤ槌右衛門。わりや見事武家に奉公するかやい。此角介が僅な切米の内、五百五十と云錢を取替た。冬年一言の斷りもせず、今も先身に逢ひ度いと云ふべい處、竹を呼出してくれとはの太い者だ。錢の濟む迄是を取」と、鍔の柄に繩付。與待て角介、鍔持が鍔を取られては、槌右衛門が首が無い。五百や六百で賣る首じやない。成らぬ」角「ヤ

お被云々―八幡
祭に鐘を振て練
り歩く仲間

比丘にん―比丘
尼の装したる寶
女
瀬せり―河岸
にて惣殿をあさ
る

ア取て見せふ」と競合ふ最中、竹走出「ヲウ角介殿道理じや。錢は竹が濟す、堪忍して下され。エ、情なの性悪男奴や、世間を見て恥を知りや。お小人町の久六は、此方より若い人、八軒屋の龜と只た一年念比して。小錢貯て宿持て、冬年も鶴が橋のお婆々へ、大きな鏡に鮪添へて据へられた。藤の棚のねぢ兵衛は、此方程鐘は振らね共、お被ひの練衆御番替り、人の氣に入雇はれて、眞性者と云はれた故、片町のふりを内へ呼入、師走に廣めが有たぞや。是でこそ女房の肩もいかるはいの。此方と言交して明けて四年、給分一文身につけず、皆此方に入上る。それに何んじや、よい年して、長屋へ比丘尼引入、日が暮ると濱素見、未だ其上に、稻荷邊りの裏屋小路を覗き廻り、揚句に此比は、夜見世狂も付たけな。私とても木竹じやなし、悟氣も仕度い、腹も立。エ、憎いとは思へ共ア、そふじやない。女子に生れた因果じや、男のさがを顯すまいと、随分私が身を約め、三度付る油も一度付け、雪駄履を草履にし、草履履を跣足で仕廻ひ、鍋釜の煤烟搔くにも此方の髭に入と思ひ、よい處を除て置く。我身の事には元結一筋買はぬは、男を大事にかける故じやないかいの。女房には苦勞をさせ、榮耀が余つて色狂ひ、聞へぬ人じや」と締泣に、恨み口説くぞ不便なる。是此處の御奉公は、中途に參つて馴染はなし、お

冥加もない一勿體ない
 徑百足一男は裸
 百貫の謎をとる
 根引の松に云々
 一身受の太夫に
 かゝる伊左衛門
 とかく
 上本町一上、勝
 るの意をかく

國迄も御内衆が悪名立るが悲しい。此上張の袷を脱ぐ、角介殿これで濟して下され」と、帶を解かんとする處へ、おこし本のりん走出、「是々竹、和女の心底奥様物見よりお聞なされ、扱々奇特な。上々迄も女たる身の鏡と、殊なふお感じなさると、奥様にも少お氣の濟ぬ事あれ共、和女を手本にお心が納つてお嬉しさ。師匠共思召、御褒美に此烏目百疋下さると。扱角介は慮外な。餘所の大事のお道具に手をかける狼藉千萬。重て此事云出さば旦那様へ仰られ、討首になさるとの御意じや」といへば、天窓角介佛頂面、竹は悦び、「ア、冥加もない有難い。兎角お禮は能い様に」と、戴きく、「これ槌右衛門殿、是持て往つしやれ。何を見込に此様に可愛ぞ」と、譬の裸百疋を、直に男に鎧持に、過たる妻が三重優しさや。人の情に夕霧が、思ひも寄らぬ此春の、子の日を根から根引の松に、かゝる藤屋の伊左衛門、我子の顔の見まほしく、ならばぬ駕籠の片端を、隠れて忍ぶ頼冠り、夕霧も簾越し、子を見る今日の嬉しさより、夫に別るゝ物憂さは、上本町にぞ著にける。宿札を見て喜左衛門、「誰方ぞ女中方頼みませふ」ハウ何方からぞ」と腰本出れば、喜「私は九軒町吉田屋喜左衛門と申者、奥様よりお頼みなされし扇屋夕霧身請の事、随分と厮廻り、金子は當月一ぱいに、お渡しなさると約束で、ゑいやおふと

正月のお客―正月の費用をして買ふ客

傾城―けいせんともけいせんと

御奇特―感心感心

色代―換撥

首尾成り 只今是へ同道。扱々節季の忙しい中私の働き、春の用意、正月のお客の穿鑿錢金の請拂ひ押詰ての節分」大豆で打出す鬼の首取た様にぞ申ける。女中「成程奥様にも其お噂 扱は彼が傾城どのか」と、駕籠を覗いて「ハウアウ傾城と云もの始て見た、矢張常の女子じや」と走入て、「奥様々々、傾城が参りました」奥「アヤ喧ましい。皆物見から聞て居た、傾城くいふまいぞ。今よりは源之介のお乳の人、侍町人の歴々に交際ふて、心も至り目恥しい、粗相して笑はれな。盃の用意せよ」と、ひそめく聲に、左近勝手へ入ければ、雪是なふ豫て申せし夕霧の事、吉田屋の喜左衛門が埒明、連立ち來たとの案内、なんと此雪が様な、格氣せぬ氣の通つた女房は、御坐んすまいが」と笑はるれば、「ヲ、御奇特く。去ながら座敷に堅い軍兵衛が居らるよ、今内へは呼れまい。表に置ても目に立つ。何ふか斯ふか」と思案半ば、門前には喜左衛門、「ア、いかふ冷たい。夕霧様は御病後、早ふ内へ入まし、火に成共あてましたい。頼みませふく」と呼はる聲、若黨 中間ばらくと、「小栗軍兵衛迎ひの者」と奴の聲、揚屋の聲遣手はなくて傾城に、蹠侍 交り喧しし。やよ日も長けて軍兵衛、「お暇申」と立出る。左近親子送つて出、色代あれば軍兵衛、「ヲ、源之介殿おとなしふ御坐るよ。追付殿の御用に立召されふ。

若い者—若い者
にの意

随分弓馬の稽古精出し申そふぞ。永日く」と暇乞して歸りけり。左近親子玄關に立休ひて見送る躰、伊左衛門遙に見て、「あれは我子か、昔の伊左衛門ならばひとの子に爲さふか。大小こそ指せず共、數多の手代、若い者、若旦那とかしづかせ、京大坂の町人の誰にかは劣るべき。侍とても負まじき、母親の駕籠を父が舁き、我子の門にはひつくばふ我親に背きたる其罰、ひつしと思ひ知り、悔み涙に頬冠の、手拭浸す計なり。奥方も端近く、「なふく喜左衛門か。其駕籠是へ」と他事なき風情、それを力に夕霧は、駕籠も思ひも漏れ出て、「平様お久しう御坐んす。奥様のお慈悲にて、あのお子のお乳母に付らると苦ながら、のらぞんさいの私が身、氣色もしかく、搦らねど、先和子様を見たさに」と、熟々と打守り、タ「あれ喜左衛門様、扱も氣高い能いお子や。聞及びしよりおとなし様、常躰の者の子が、七ツや八ツで斯ふ有ふか。人は筋目が恥かしい。流石父様のお子程有。父様のお心が左こそと推量せらる」と、表の方へ目を配れば、伊左衛門も首延し、魂脱て縁子の、袖に飛入ばかりなり。左近夫婦は氣も付ず、「サア喜左衛門、先少成共金子渡そふ。いざ座敷へ。是源之介、あの人は我身の乳母、馴染をかけていとしがり、此母も同前に、大人になつても乳母は見捨ぬものじやぞや。吉田屋此方へ」とに

むさし—機

あこぎ—阿漚の浦に引く鯛のたび重ると云ふ歌より飽き足らぬ意に轉用せり

空會—出くはす

こやかに、打連れ座敷に入にけり。夕霧四邊を見廻し、「なふ懐しや。先刻にから抱付度ふてならなんだ」と、繩付て泣ければ、伊左衛門も走入、思はず知らず、「やれ可愛の者や」と抱付處を、源之介飛退き、「やい駕籠舁奴、むさいなりで侍に抱付く慮外者奴」と、脇指に手をかくる。伊ア、く申、眞平く御免なりませ。私が忤に、丁度お前程なが御坐れ共、小さい時から人手に渡し、見度いくと存ずる折節、お前を見付如何も堪へられず、心亂れて慮外の段御免遊ばし、あこぎな申事なれど、お侍のお慈悲に、父かといふて、私に抱付て下されませ」と、額を疊に摺付て、手を合せてぞ泣居たる。源「何んの己れを父といはふ。おりや父様にいふて來う」と、駈入る處を夕霧抱留め、「是申、乳母が始ての御訴訟頼上る」と泣ければ、源「乳母の云やる事ならいふて遣ふ。父様なふ」と抱付を、伊ヲ、忤い、父じやく」と嬉し泣き。夕霧もうら山敷、「次でに私も母といふて下されかし」源「ヲ、いふて遣ふ。是は母様」名ヲ、私「が子じや」源「是は父様」伊「おれが子じや」一人が中の思ひ子の、親子夫婦の寄合は、又今生では叶はぬ、と泣つ笑ふつ様様に、寵愛こそは道理なれ。奥より左近が聲として、「藤屋伊左衛門、藤屋伊左衛門」と呼ぶ聲す。南無三寶と逃出れば、續いて左近走り出、袖を控へて、「是いにしへ參會せし阿波の大

つもり一見くびる

臣じんと異名いみやうを呼よべし平岡左近、其方そなたに恨うらみはなけれ共、夕霧ゆきにいふ事有あり。それにて聽聞きこ致ちされよ」と、かばと突退つきのけ、涙なみだを浮うかめ、「エ、僞いつはり多おほき遊女あその習ならひ、驚おどくべきにあらね共、是程迄、能よふもく、此左近こゝろをつもりしな。此子こゝろは伊左衛門いざゑもんが倅せがれとは、先年死ししたる遺手やうての玉たまが咄はなしにて、疾さつくより聞付きこつ、無念むねん共口惜くちをし共心一ひとこゝろツに堪たへかねしが、いやく改あらめては侍しやくの身分立たず。殊ことに此子こゝろも、我々夫婦われわれを誠まことの父母ちちうへと思おもひ睦じつましく、不便ふびんさも増ます故ゆゑに、縁えんでがなと諦あきらめ、二世にせと連添れんぞんふ妻つまにも深く包つみ、夕霧ゆきが生なんだる某それがしが實子じつこと僞いつはりしかば、さすが女房にようばうの優やさしくも、夕霧ゆきが心を憐あはれ、乳母うはと名付なづけ、此内こゝろへ呼取よりしは、皆此倅せがれが可愛あいさ故ゆゑ、それになんぞや淺あましい躰ていにて忍しのび入いり、親おやよ子こよのと名乗な合あひ、知らぬ子こに智ち恵ち付ける。ヤレ稚せきくても此子こゝろはな、馬うまに乗のり附つせ、老先おいさき立た身み樂らむ身みの倅せがれに恥はぢを與あたへん爲ためか、左近ひだりが武士ぶしを捨すて爲なす。色いろに迷まよひ馬鹿ばかつくし、女共おんなが手前てまへも恥はぢし。エ、恨うらめしや是非是非もなや。倅せがれを返かへす連歸れんきれ、町人ちやうどの子こに刀かたな、脇指わきさし無用むようなり」と、引寄ひよせてもぎ取處とへ、奥方おくは走出はしりいで、「なふ情なさけなや。此子こゝろが事ことは我われとても、直ちきの咄はなしを聞きしか共、調しらべてはお侍しやくの一分いちぶん廢すたると思案しあんして、囉もひ切きたる此子こゝろなり。今返かへしては武士ぶしが立たぬ、一寸いちゆんも離はなさぬ」と、抱だ上あるを引放ひなし、左ひだり身みを立たて名なを立たて、一分いちぶんを立たるといふも子孫こゝろの爲ため、實子じつこも持もたぬ此左近こゝろ

直の話—直接に
聞いた話

楓の云々「楓は赤い子供の手をさす、楓といふより病葉と櫻けてたまさかの意をもたず

誰が爲に身を惜まん。一分捨る合點」と、大小もぎ取突出す。罵いやく「假令此方は返しても、契約して子にしたからは、此雪が返さぬ。夕霧も戻さぬ」と、取付を引退け、縫付を引放し、左夫をもどく見苦し」と、奥方引立、立關をはたとさして入にハッリ。伊左衛門も夕霧も、前後に暮て途方なく、源之介泣出し、「コレ父様母様、おりや駕籠昇の子ではないはいの、傾城の子にはなりともない。父様の子じやはいの、母様の子じやはいの。此處明てくれ。やい侍共、明けをれやい」と泣叫び、立關の戸をとんくと、叩く楓のわくらはに、應ふる者もなかりける。夕霧息も絶々ながら「是源之介合點しや。眞實其方は左近殿の子ではない。母こそは夕霧、父御はそれ藤屋伊左衛門、さもしい人と思やるな。江戸迄も知られて、左近殿より大身の武家に親子も有ぞいの。母故の御牢人、其方も爰目見せまじ、と左近殿の子と云しが、誠の親と、假親の心はさしも違ふかや。左近殿も其方をよも憎ふは有まいが、我身の無念、一旦の腹立に、いとしい其方を捨らるよ。彼の父様や此母は、今の如く人中で、踏れぬ計に恥を搔き、云下られても其方を抱が嬉しい、逢ふが嬉しい。肉身分々し本の子は、斯ふもいとしい物かいの。母が此氣色では、最ふ逢ふ事はなるまい。父様の事頼むぞや。せめて一年しつとりと、一つ

寢臥もしたいぞ」と、搔口説き染々と、眞實盡す憂涙、源之介聞分けて、「此方が本の母様か。父様は此方か。傾城でも駕籠舁でも、本の親がいとしい」と、涙まじりの笑ひ顔血の筋見へて哀れ也。伊ヲ、出来いたく。侍とても尊からず、町人として賤しからず。尊い物は此胸一ツ。氣遣ひせまい伊左衛門が妻子、憂目はさせぬ、力落すなく」と、いへ共我も力なく、只茫然と成にけり。吉田屋喜左衛門駕籠舁雇ひ、「是非なし共お笑止共、参りかよつて我等の迷惑。外の事ならば何卒思案も致すべきが、申ても霧様は親方がより、殊に病中大事のお身、先連歸つて扇屋へ手渡せねばお爲にも如何。いざ召ませ」と舁寄する。夕扱は二度、別れて廓へ歸るかや。ハアウ」と計にかつぱと伏し、既に息も絶へんとす。伊左衛門抱起し、吉田屋は印籠の氣付、種々看病しつ漸性根付けるが、夕昔より幾人か斯した身の憂難義、咄にも聞つれど、是程の辛い事、重なれば重なるかや。今逢ふて今別ると。彼の子をせめて相駕籠で、卒おじやや」と抱寄するを引放し、伊それは喜左まで迷惑、これ世にも人にも恨みなし。左近もいはゞ尤至極、女房が情といひ、誰か親子三人に仇するものはなけれども、親に逆らひ寶を費し、身を奢りたる其酬ひ、あれあの天道に睨まれて、何國にて身の立つべきぞ。百里來た道は百里歸る。昔

の榮耀えいこう程憂目を見ねば罪消えず。男故の苦勞と思ひ、歸つてくれ」と泣諫め、賺し乗すれば弱々と、云度い事の數々も、せき來る涙、せき來る胸、「命の中に今一度、顔ばせ見度い逢度い。末期の水を、彼の子の手から頼むく」と、夕霧の名に立替る夕霞、見送り見送る門々の、松に太夫が面影を、殘して別れ三重歸りける。

下之卷

相の山「夕べ晨の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞てナ驚く人もなし。合手野邊より彼方の友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥途の友となる」鼻屋「エ、物囉ひでもめかりを利しや。是程醫者の出入やら、神子の御符のと、屋内が持返いて、七種囉す間もないが目に見へぬか。通りやく」と云處へ、梅庵御見廻四枚肩、おりるの衣、長羽織、醫者は奥へぞ通りける。伊左衛門編笠傾け小聲に成、「やれ源之介、母が氣色が重そふな。命の内にな一度見せたたく、此姿にて來れ共、最早見せる事も、見る事も成まい」と、呷けば源之介、「早ふ逢ひたい事じや」とて、父に縋りて泣居たり。「梅庵様お歸り」と、表へ出ればやり手杉、家内の上下ついて出、「病氣は如何で御坐ります」梅庵頭を掉て、「普婆

相の山―前に出
グ
血脈―佛より授
かりたる守札
めかり―目
四枚肩―四人に
て擔ぐ駕籠
普婆―釋尊時代
の名醫

扇謁—支那三國
時代の名醫

來世金—未來の
冥福を祈る金

もうへ—團圓裏
ぶち
うたふ聲—善知
島にかく、善知
島安方は奥州外
ヶ濱に住む親子
の島

扇謁でも叶ぬ。物に譬へていはゞ、干上つた土器に燈心一筋燈ひて、風吹に置様な物。今日の日中か遅ふて初夜限り、最早毒も何も構はず氣任せにしたがよい。ア、惜い人じや。夕霧くと云て、親方にかい金儲けて遣た女郎じや。達者な内に此梅庵、彼の人を一年持ば、今比は匙取らいでも樂するもの。可借金を彼の世へ遣、是がほんの來世金じや」と、云捨歸れば、扇屋一家は打萎れ、返答する者もなし。伊ヤレ源之介、醫者の云分間たか。最ふ叶はぬ思ひきれ」眞ア、悲しや、何卒母様の死なしやれぬ様にして下され」と、取付嘆ぞ不便なる。扇屋了空夫婦、涙片手に蒲團手づからおうへに敷き、「今ふて慰めて下され」あつ」と親子は笠傾け、奥を見遣れば夕霧は、芙蓉の眼尻衰へて、夕べ待間の玉の緒の、今ぞ切れ行息遣ひ、やり手禿に手を引れ、肩に懸りし其姿、親子は目も暮れ胸塞り、漏る涙を夕霧も、それと見るより飛立つ如く、心を胸に積み疊む、蒲團の上にかつばと伏し、思を涙に通せて、人目を中に憚かりの、せきたぐるこそ哀なれ。『サア、相の山、早くく』といひければ、伊あつ」と涙の玉簪、うたふ聲にも血の涙、子は安方の嘯りや。

あひの山

淨き一憂き

鹿島一貫すにか
ふる雪一客をふ
るにかく

朝込一朝麻の門
の聞くるを符ち
て入る(燈遊笑
覽)

浪花かや云々一
松の葉三の巻の
歌
難波一七ツにか

撫子一源之介を
さす

相の山夕べ晨の淨き勤、花一時の眺めとは、知れ共迷ふ數々の、文に染ても誠は薄く、思
 方へと駿河なる、富士も麓の戀の山、我踏分て我迷ふ、夢の中戸の夢枕、月を憎みし
 夜半も有。辛い座敷を囉はれて、冷泉餘所に行く身を彼の人に、ちよつと鹿島の神も知
 れ。しんぞ嬉しさを可愛さの、身にも堪へて忘れめや。初手二度迄はふる雪の、つみも恐
 れぬ無理起證。神も佛も二つの耳に、嘘と誠を私語の、橋の蜘蛛手に物思ふ。格子叩くを
 合圖にて、稀の御見も籠越し、何を歎くぞ歎きても、身は十年の繋ぎ船、出船の今日の
 名残の床、明日の朝ごみ枕より、跡より遣手の責來るは、呵責の責より猶辛く、仕廻太
 鼓の音迄も、寂滅爲樂と響くなり。死出の山路は誰とても、一つ泊の旅の宿、浮世隔る
 涙川、此世に浮名更科や、姥捨親捨身を捨て、櫻花かや散りく。五ツでは糸をより初め、
 六ツや難波に此身沈めて、八ツで遣手に附添ひ、九ツで戀の小使ひ、十ヲや十五の初姿、
 鬚入すの地髪房々、衣裳のこなし、心利發で道中能ふて、戀知りわけ知り、文の文章、
 思ひりりり。床は伽羅く、謠沈香や麝香の香迄、今の手向と燻らする。種蒔捨し撫

白露云々―果敢
ない事、知らぬ
にかく

水をく―親子
から死水をとつ
てもらふ

子の、花の盛を餘所に見て、惜や三途の川霧と、消る其身も人目にも、昨日今日とは今迄に、數珠を手に取る事もなく、何をか後世の土産共、いさ白露の仇し野や、相の山野邊より彼方の友とては、櫛一枝一帯、これが冥途の友となる。知邊となれや此詞、形身共なれ回向となれ。迷ふな我も迷はじ」と、思ひを籠し一節に、聞人哀れを催せり。扇屋夫婦情深く、「なふ此方は聞及ぶ藤屋の伊左衛門殿そふな。忍ぶ事も時に依る、娘とも思ふ夕霧が、臨終の心が堪能させたい。早ふ逢ふて下され」伊ア、忝いと走り寄り、「太夫又逢ひに來たはいの」夕伊左衛門様私や死ぬるはいのふ」頭「母様死んで下さるな」と、縋り付ば家内の上下、「わつ」と一度に聲を上げ、泣沈むこそ道理なれ。重き枕に手を合せ、夕旦那様幼稚い時より御苦勞に預り、御恩も報せず死します。是さへはかなふ御坐んすに、いとしい男、可愛子に逢せて下んす。もふ私や佛で御坐んす。逆の事に伊左衛門様の手で、此髮切て囉ひ、佛の形になつて、親子の手から水をく」と云聲も、絶々にこそ成にけれ。伊チ、髮飾は假の戯れ、佛の三十二相とは新木作りの卒塔婆を云。只今某が切髮は阿字の一刀、彌陀の利劔を以て、煩惱の羂絆と觀念せよ」と、指添へ抜て、二人添寢の寢亂髮、ふつと切れば源之介、「可惜髮を」と身に添へて、悶へ

八功德池—淨土
にある八つの池
雨甘露云々—經
文、よい雨を降
らすは衆生を憐
むため
上利—淨+

臥てぞ歎きける。重て櫛の水を携へ、是は夕霧。人界は一生造悪の娑婆世界、別て遊君
流れの身は、面に紅粉を飾て數多の人を迷はし、綾羅錦繡を身に纏ひ、多くの酒を酌流
し、煩惱の種を植て、菩提の根を絶つとは遊女の事。此水は、極樂の八功德池の水と思
ひ、雨甘露法雨愍衆生故と聞く時は、是を飲んで心身を霑し、九品の上利に往生し、半
蓮を分けて待て居や。是其しるし」と、同じく髪を押切て、親子夫婦手向の水、哀れに
も又頼もしし。斯る處に吉田屋の喜左衛門、六尺に金箱持せ、「是は平岡左近様の奥方お
雪様の御使、夕霧を請出す所、其筈違ひ是非もなし。され共代金八百兩、其爲の金子
なれば、外に遣はん様なし。御病氣以ての外の由、此金にて請出し、一時なりとも廓の
外にて往生させませとのお使なり」と、いふ處へ下袴の若い者、金箱數多擔させ、「是
是扇屋殿、我等は藤屋伊左衛門様の御老母、藤屋妙順様よりのお使、伊左衛門様は父御
の御勘當、今は此世に亡きお人なれば、お袋様に我儘に勘當御免はなり難し。夕霧様に
は御一子迄有事、嫁御、孫御に勘當はなし。藤屋妙順が嫁を廓の内にて殺されず、一時
成共廓を出し、外にて往生させましたいとお願ひ、金子二千兩持參致す。サアく片
時も廓を出して下され」と、まほひ勇めば扇屋了空、「御尤なれ共、金子を取て隙を遣と

切れ離る一怒心を離る

顔も生々一萬死の夕霧が助かりたる趣向は不自然なり是名ある

は、行末の年月無事で勤める女郎の事。今死ぬる夕霧に、大分の金銀取て隙をやるは、此扇屋は盗人と申者、殊に全盛して、親方に大分儲てくれられた此太夫、命さへあらふならば、此扇屋が身代半分は入れます。此金子、夕霧和女に遣る。臨終に金やるとは異なる事申様なれど、此金では萬部の經も讀ると。跡の追善、遺言召され。サアく暇を遣た、廓を連てお出なされ」と、切れ離れたる意氣方は、さすが所に住ばなり。今を限りの夕霧につこと笑ひ、「ア、どなたもく有難い御心ざし、お禮申て下されませ。是源の之介、此金は親方殿より下された、そなたに母が譲りじや。由々しい町人になつて、父様の名を揚てたも。わがみの出世を草葉の蔭より見るならば、萬僧供養にも勝りて母は佛になるぞや。去ながら、伊左衛門様源之介に、妙順様を竝べて、三尊の來迎と拜みたふ御坐んす」ヤ妙順様呼に走れ」と立騒ぐ。「いや呼にやる迄もなし、氣遣がつてアレ門口に」と、手代伴ひ入れれば、妙なふ花嫁御珍しやく、嬉しい對面。誠の佛は西方のお迎ひ、此妙順は此方の家へ迎へ取、金すくめにして養生し、此姑が精力で本服させて見せふぞ」と、家内が勇む氣勢に連れて、諸病は氣より本服の、顔も活々にこくと、立て躍るや扇屋夕霧、憂却つて悦びを、語り傳へて三十五年、又五十年又百年、千歳の

人を殺さぬ作者
の老練心なれど
も奇異の感あり

秋の夕霧を、
猶^{なほ}萬代の春の花、
見る人袖^{そで}をぞ列^{つら}ねける。

